

暦(こよみ)と、松笠の暮らし(その9 保関谷の社日さん③)

保関谷の社日さんの塔、その正体は何か？ 今回はその起源などを追ってみます。

社日さんの塔ですが、江戸時代、京都にいた大江匡弼(おおえただすけ)という民間学者が、天明(西暦では 1781~1789 年)の頃に書いた『春秋社日醮儀』(しゅんじゅうしやにちしょうぎ)という著書に、その起源があるようです。

その著書の中で、大江匡弼は、おおよそ次のようなことをいいます。「五穀が成熟しなければ、万民の身命を保ち養うことはできない。農は、土農工商の中でも、一日も欠くことのできないものである。農民の稼業耕作ほど世に大切なものはない。農業を稼業とするものは、その稼業に励むべきである。」「農業を稼業とする者は、春と秋の社日において、五穀の祖神、守護神、土の祖神への感謝と、祭礼を行うべきである。そうすれば、五穀盛熟、五穀豊穰となる。」、と。

そのうえで、その祭礼の作法などを示すのですが、《図1》のような塔を建てることも、その作法のひとつとなっています。よく見ると、周囲の壁を除けば、保関谷の社日さんの塔とそっくりですね。

また、彼は、「五穀の祖神、守護神、土の祖神」は、その土地に元々おられるといえます。ですから、社日さんの塔を建てるにあたっては、どこか他の神社から、わざわざ神様を御分霊し、御勧請する必要はなく、石柱に5柱の神名を刻んだだけで、神様を祀(まつ)る社(やしろ)を造立することができる、ということになります。

そしてもう一点。明治 20 年代半ばに作製された地籍図を調べたところ、保関谷の社日さんの塔があるあたりの字名は、「社日山」だということが分かりました《図2》。明治初期の地籍図作成では、江戸時代の地名情報が、そのまま使われたことがあったようです。もしそうならば、江戸時代、この地は「社日山」と呼ばれていて、なぜそう呼ばれたかという、社日さんの塔が建てられていたから、という想像も可能です。

それにしても、江戸時代に、遠い京都で生まれた農耕儀礼が、どうやって保関谷にたどり着いたのでしょうか。興味深いですね。



《図1》 京都大学貴重資料デジタルアーカイブより



《図2》 明治20年代半ばに作成の公図。「字 社日山」がみえます。